

1 北海道のカラマツ人工林の現状とニーズ

(1) 北海道のカラマツ資源

北海道のカラマツ人工林は 1880 年代ごろから造林が始まり、2004 年度末の一般民有林の面積は約 329 千 ha となっている。カラマツ造林が本格的に行われ出したのは 1950 年代以降で、当時の国、道、一般民有林合計の年平均造林量は 10 千 ha 前後であり、最大では 1954 年の約 33 千 ha であった。その後 1973 年ごろまでは年間 10 千 ha 以上行われていたが、1974 年以降は造林量が低下し現在では年間 2 千 ha 前後の造林量となっている。

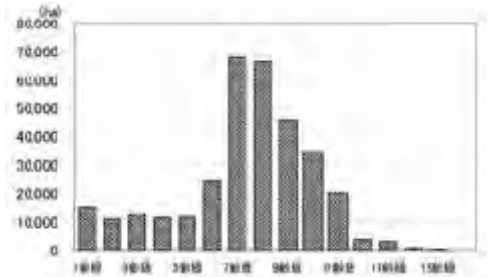


図-1 カラマツ人工林の齢級別面積

(2004年、北海道林業統計)

カラマツ人工林資源構成(図-1)を見ると、齢級別内訳は 6 齢級～11 齢級が 260

千 ha と最も多く全体の 79% を占めている。また、成熟期を迎えている 8 齢級以上は 175 千 ha で全体の 53% を占めており、今後、主伐期を迎える林分が多い。

(2) カラマツ人工林の現状

カラマツは、他の樹種と比べ成長が早いことから、杭丸太、足場丸太などで需要が高まり、一部電柱材等を除いては短伐期施業が主体に行われてきた。その後、カラマツ材は、炭坑の閉山や安価な輸入材の増加、木材価格の低迷などから、梱包材やパレット材を中心とした利用で推移してきている。また、一般民有林では、小規模な所有者が多く、さらに、不在村化、高齢化に伴い、自ら森林施業や林業経営を行うことのできない森林所有者が増加しており、適正な森林の整備が進んではいない。

一方、カラマツ材の価格は(図-2)、2000 年では素材(中丸太)で 11 千円前後で推移していたが 2001 年後半から 10 千円を割り 8 千円後半で推移している。2003 年から多少価格は上昇したものの 2004 年現在 9 千円前半で推移している。カラマツチップについては、1998 年では 5 千円台であったが、2001 年以降は 3 千 7 百円前後で推移している。

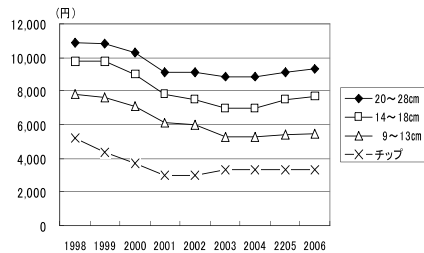


図-2 カラマツ木材価格の推移

(木材市況調査月報)

(3) カラマツ人工林材のニーズ

1950年代以降積極的に造林されてきたカラマツ人工林資源は年数の経過とともに径級も増加し量的質的に充実してきている。その間、試験研究機関はカラマツの欠点（ねじれや曲がり等）を解消するために加工並びに施業技術の開発を行い、良質材など多様な用途に対応した製品生産が可能となっており、森林所有者の多くは短伐期ばかりでなく、長伐期化に向けた施業にも取り組むようになった。

1998年から2004年のカラマツ素材年度別生産量(図-3)を見ても生産量は増加しており、径級別生産量では年々大丸太の生産が多くなってきている。

一方、カラマツ材の用途別では梱包材としての利用が最も多く次いでパレット材、集成材原板、ダンネージ材の順となっている。特に近年は集成材の生産量が多くなってきており、2004年の構造用集成材の出荷量は9千m³を超えている(図-4)。

さらに、近年では、森林資源の有効活用を図るため、地域の材を地域で使う「地材地消」の取り組みを進めており、カラマツ材の住宅部材への利用を推進してきた。カラマツ材を構造用に使った住宅は近年増加しており、2005年度末で1千棟を超えた(図-5)。カラマツ住宅の増加は、カラマツ人工林資源が成熟してきたことによるものと乾燥技術の普及や、集成材加工施設の整備により、曲がる、ねじれるといったカラマツ材特有の欠点を克服し、高品質の材を供給できる体制が整備されたことに加え、各地域で実施されたカラマツ住宅の見学会などにより、一般住民に対し住宅部材としての認識を新たにしたことによる。さらに、強度や色合い、地元の材で家を建てるなどのこだわりを持った施主や工務店が増えていることが上げられる。今後はさらに住宅用建築材としての需要が見込まれ、梱包材、パレット材と合わせて北海道の主要樹種としての役割は大きい。

現在のカラマツ人工林資源は、高齢級林分に偏っているため、計画的に更新を図り、齢級構成比の平準化を行い、安定的に供給できる体制を整える必要がある。

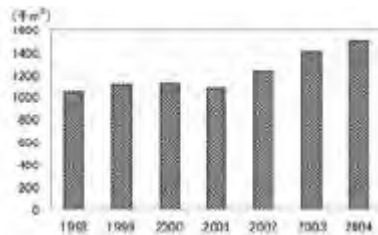


図-3 カラマツ素材生産量の推移

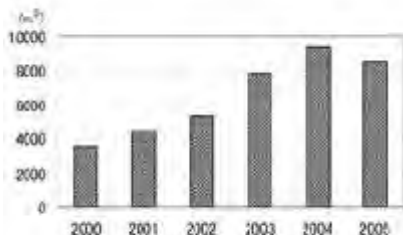


図-4 カラマツ構造用集成材の出荷量の推移

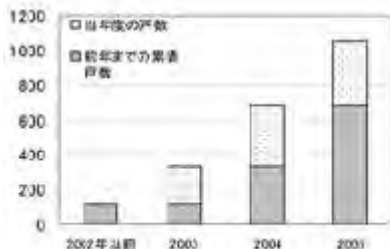


図-5 カラマツ住宅戸数の推移